

特別寄稿

一言語聴覚士の考えたこと～臨床を通して

武内 和弘¹⁾

Some clinical thoughts by a speech-language and hearing therapist

Kazuhiro Takeuchi, SLHT, PhD¹⁾

要 旨

半世紀を越える言語聴覚士としての臨床経験を振り返り、スピーチ・セラピーについて悩みかつ反省したことについて記し、併せてシンギュラリティを超え汎用人工知能の急激な進歩を目前にした言語聴覚士の未来について私見を述べさせていただく。

言語聴覚士は、トータル・コミュニケーションの観点からの指導が重要であり、真に相手に伝わる「生きたことば」を指導しなければならない。言語（シーニュ）は、シニフィエ（記号内容）とシニフィアン（記号表現）が相互に一体となったものであり、この点を忘れたスピーチ・セラピーは、メルロポンティの言う「死んだことば」のレッスンとなってしまふ。また、Quality of Lifeを忘れず社会的・包括的ケアを念頭にセラピーのゴール設定を心掛けていれば、デジタル医療が急速に進歩する未来においても言語聴覚士は生き残るであろう。

キーワード：スピーチ・セラピー，コミュニケーション，生きたことば，QOL，デジタル医療，言語聴覚士の未来

はじめに

いわゆる“大学紛争中”の1970年（昭和45年）春に岡山大学法文学部（言語学専攻）を卒業し、岡山市北区に位置する社会福祉法人旭川荘・重症心身障害児施設旭川児童院に入職した。正式の辞令は児童指導員であったが、院内では「言語訓練士」と名乗って重症心身障害児（以後、重障児）の言語訓練を担当した¹⁻³⁾。

しかし、一日中身体を前後にゆする常同運動のみの入所児も多く、言語指導は困難を極めた。寝たきりの重障児の中にはADL全介助ではあるが、なんとか会話可能なものもいて、先輩のNさんは、このような重障児の文字通り喉から絞り出す努力性発話を

なんとか聞き取って心身障害児詩集「ともしびのうた」（表1）を刊行されたりしていた。この重障児施

表1 心身障害児詩集
「ともしびのうた」

おかあちゃん

おかあちゃんとけんかをした。
おしっここのことで。
「おしっこ言いなさい」と言った。
ぼくが「ごめんなさい」言った。
おかあちゃんが負けた。

旭川児童院 1969

1) 前高知リハビリテーション専門職大学 リハビリテーション学部 リハビリテーション学科 言語聴覚学専攻 教授
Former Professor of Division of Speech-Language-Hearing Therapy, Department of Rehabilitation, Faculty of Rehabilitation,
Kochi Professional University of Rehabilitation

設における言語聴覚士としての厳しい原体験が、その後のコミュニケーションとは何か、伝え合いにおける言語の役割は何かと模索し実践する契機となった。

その後、広島の地に移り広島大学病院では口蓋裂言語障害、広島鉄道病院では失語症や運動性構音障害を中心に30年有余言語聴覚障害の臨床に携わった。

1995年（平成7年）からは後輩の言語聴覚士の養成にも取り組み、県立広島大学、広島国際大学、さらに広島都市学園大学を経て、最後に本学高知リハビリテーション専門職大学の開学に伴って土佐市に移ってきた。結局、半世紀を超えて言語障害児・者の療育や教育に関わってきたことになる。

この度、本学の完成年度を迎え定年退職となるのを機に、この50有余年に渡る言語聴覚障害の臨床についての想いに加えてセラピーの失敗や反省について述べる機会を与えていただいた。深く感謝申し上げます。

言語臨床での反省

1. トータル・コミュニケーション

大学の法文学部で言語学を専攻しただけの新米言語聴覚士にとって重障児施設での言語訓練の体験は過酷であった、声を掛けてもほぼ無反応の重障児に対してスピーチ・セラピーの手がかりは全く見つからなかった。同じ部屋で、同じ身体状態で寝起きし、たとえば右手が不自由なら右手を縛り、寝たまま、同じ時間に同じ食事を摂り、同じように一日を過ごす。そうすれば、言語表出の全く無い「重症心身障害児」のぐずる声が、腹が減ったのか、尿意を催したのか、外気に触れなくなったのか程度なら分かる

かもしれないと考え付くのがせいぜいであった⁴⁾。

そんな折、メラビアン⁵⁻⁶⁾が「情報を得るところ」と「それが与える影響」について“7-38-55の法則”とも呼ばれる研究結果を公表した（表2）。彼によると、情報伝達における言語情報（Verbal）の貢献度は、僅かに7%で、聴覚（Vocal）38%、視覚（Visual）55%に比して圧倒的に少いという。さらに、アフリカにおける類人猿対象の研究結果で知られる西江⁷⁾は、伝えあいには「ことば」以外に「人物特徴」「体の動き」「場」「生理的反応」「空間と時間」「人物の社会的背景」の7つの要素が有る（表3）と指摘していた。また、国語学者の林⁸⁾は、コミュニケーションを視覚材料、聴覚材料、触覚材料、嗅覚材料、味覚刺激、抽象材料、総合行動に大分類し（表4）、実に多彩な手段や方法を一覧表にまとめて示している。

このような指摘に接し、結局、失語症の臨床で唱えられている「トータル・コミュニケーション」の視点から言語障害児との意思疎通を考えるべきであると思いついた。そこで、言語障害は比較的軽度のいわゆる「社会的重障児」に対して、利用できそうな会話支援機器というとカタカナ・タイプライターくらいしか当時は無かったので、麻痺の強い手にスティックを握らせ、キーボードを一字一字押して文を綴る練習を試みたりした。

現在は、豊富な簡易会話支援機器（VOCA）や多彩な意思疎通機器が利用できる。従来からのNon-Verbal Communicationであるジェスチャー、絵やイラストの使用、五十音図の指さし、コミュニケーション・ブックなどの活用はもとより、“えこ

表2 メラビアンの法則

情報を得るところ	情報が与える影響
言語情報（Verbal）	7%
聴覚情報（Vocal）	38%
視覚情報（Visual）	55%

A.Mehrabian, 1971

表3 伝えあいの7つの要素

(1)	「ことば」
(2)	当人たちの身体や性格面での「人物特徴」
(3)	顔の表情や視線の動きを含む「体の動き」
(4)	伝え合いをしている人物がいる周辺環境としての「場」
(5)	直接的な接触によるものや顔色の変化などに見られる「生理的反応」
(6)	お互いの距離、当人たちが占めているスペース、そのときの時刻、 伝え合いの内容を表現するためにかかる時間などの「空間と時間」
(7)	当人たちの社会生活上の地位や立場といった「人物の社会的背景」

西江雅之, 2012

表4 多彩なコミュニケーション

視覚材料；直接刺激	土下座・平伏
視覚材料；形象記号	舞踏一般
聴覚材料；模写記号	擬音語・擬態語
触覚材料；約束記号	点字
嗅覚材料；直接刺激	有毒ガスに臭い
味覚刺激；象徴記号	ふるさとの味
抽象材料；約束記号	数字によるコード化
総合行動	謹慎, 接待, デモ行進

林, 1973

みゆ”や“ドロップトーク”などのコミュニケーション支援アプリも豊富に利用可能となった。機器の操作も、ポイント・タッチ・スイッチ、呼吸スイッチ、まぶたスイッチ、さらに脳波スイッチまで開発され、さらに進化中である。隔世の感がある。

2. シニフィエ（記号内容）とニフィアン（記号表現）

重障児施設旭川児童院に4年間勤めた後、広島大学病院言語治療室に移り口蓋裂児のスピーチ・セラピーに取り組んだ。21年間在籍した。ここでは口蓋裂児に特有な声門破裂音や咽頭摩擦音等の構音障害及び開鼻声への対応が主であった⁹⁻¹⁰⁾。

あるカ行構音障害児のスピーチ・セラピー時のことである。カ行音は、うがい音からの誘導法を多用した。ごく少量の水によるうがいから始め、だんだん水を少なくし水滴1滴のうがいができるまで導く。次いで水滴無しで咳様の音 [ka] が産生できる

まで誘導する。この咳様音に母音 [a] を後続させると「か音」が構音可能となる。この「か音」に強弱/長短/高低を付け、さらに連続調音「かかかかか…」を練習させ習熟と強化を行う。次いで語頭に「か」の付く単語の構音練習へと進める。たとえば、「かお、かえる、かもめ、からす、かいじゅう…」のごとくである。連続30回誤りなく構音できると、次のステップ（たとえば「こ音」）の練習に進むことにしていた。

熱心にこの練習を繰り返していると、対象児は疲れてきたのであろう「もう、たえる（帰る）」と言われてしまった。「か音」が「た音」になっており全く正しく構音できていない！と愕然とした。あれだけ繰り返ししつこく「か音」の構音練習を重ねた後である。

近代言語学の開祖フランスのF.ソシュール¹¹⁾によれば、言語というシーニュ（記号）は、シニフィエ（記号内容）とシニフィアン（記号表現）が互いに融合したものである（図1）。今回のタエル/カエルの失敗は、この大切なシニフィエ（記号内容）である（“帰る” という意味）を忘れて、一方的にシニフィアン（記号表現）（kaeru）の構音ばかり指導した、いわばシニフィエ（記号内容）ばかりに拘った片手落ちのスピーチ・セラピー実施結果の失敗といえる。反省しきりであった。

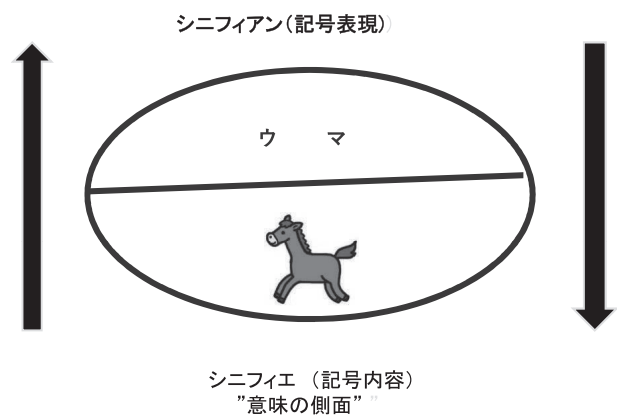


図1 シーニュ（記号）

3. 「生きたことば」と「死んだことば」, さらに「呼びかけのことば」

スピーチ・セラピーは、メルロポンティ¹²⁾の唱える「生きたことば」を対象にすべきであるとも反省した。たとえば、「午後3時になったので、もうその日は帰りました。」などという既に活字になってしまっている文の類は、彼によれば「死んだことば」である。「あ～疲れた。今日はもう帰ろう！」などという本音の“いまここに”ある叫びが「生きたことば」だという。メルロポンティは、子どもの訴えや詩が生きた言葉の代表であると指摘している。

「か」で始まる多くの単語の構音のみに着目した反復構音練習は、シニフィエ（記号内容）を無視した、あるいは忘れた「ka・e・ru」というシーニュ（記号）ばかりの「死んだことば」の反復練習だったのである。このような訓練では、言語療法室からの帰途に道端の蓮の葉の上に見つけたカエルを見て、「あっ、タエルさんだ！」と構音するに違いない。「生きたことば」の「カエルさんだ」が構音できるように、シニフィエ（記号内容）を意識した訓練や指導をしなければならないと痛切に反省したことである。

なお、メルロポンティは、晩年に「呼びかけのことば」を追加し、相手の心にダイレクトに響くことばの重要性も強調している¹²⁾。

4. 「障害」を「医学モデル」から「社会・包括モデル」として捉える

まだまだ言語聴覚士初心のころに出逢ったスピーチ・セラピー終了時に「私は一生結婚しません」と言い残して去った口蓋裂女兒のことも忘れられない。カ行やサ行・ラ行・ツ音などの構音障害がひどく、幼稚園でずいぶんことばをからかわれて育ったようだった。毎週1回30分程の練習を重ね構音障害はすっかり良くなった。そこでスピーチ・セラピーの終わりを告げた。小学1年生になっていた。その来院最終日に上述の言葉を残して去っていったのである。構音障害はほぼ完治とってよかった。それなのに「私は一生結婚しません」である。心の傷

は癒えていない⁴⁾。Quality of Lifeの改善には程遠い。

この女兒は、国際生活機能分類¹³⁾の機能障害（心身機能と身体障害）の個人因子レベルまでは改善したかもしれない。しかし、健康状態（不調、疾病、外傷）の「活動制限」および「参加制約」のレベルは、環境因子も加えたまでの改善に至ってない。障害者の権利に関する条約に明示されている「合理的配慮」の視点からの取り組みが全くできていなかったといえるであろう。「言語障害」も、医学モデルから社会モデルさらに包括モデルとして「障害」を捉えることが要求されていたのである。反省しきりである。

後に、言語聴覚障害の当事者団体である広島言語友の会の結成支援や失語症団体の交流会の開催、また成人吃音者団体言友会などとの関わり、在宅ケアを考える会の立ち上げとその後の取り組み等の原点となったといえるケースである。

言語聴覚士の未来

1. デジタル医療

トマトの栽培支援に1日1回撮影の栽培農園の衛星写真が使われ、ゴルフボールの人工知能（artificial intelligence；AI）による弾道解析から効率的な練習法を探るなど、シンギュラリティ（AI進化の特異点）の到来に向かって今まさに歴史が変わろうとしている。インターネット経由の遠隔授業やアバターロボットの代理授業出席などの話題も尽きない。スピーチ・セラピーの分野では、失語症の呼称練習用機器としてランゲージマスターや「伝の心」などの訓練用機器が多数実用化されて久しい。近年は言語訓練用映像教材も豊富に用意されている。

医療面では血圧や心電図波形の長時間記録と解析にAIを取り入れたデジタル医療が導入されつつある。この解析手法とその応用は、言語聴覚障害の領域では、たとえば構音障害を含んだ比較的長時間の発話の音響情報解析など多方面に広く応用できそうである。

2. 生き残り言語聴覚士

AIの開発研究機構OpenAIが2022年11月に公開したChatGPT（人工知能を使ったチャットボット）の広まりも驚異的である。100万人のユーザーを得るのにわずか5日しか掛からなかったらしい。このような汎用人工知能（Artificial General Intelligence；AGI）がますます進化し言語聴覚士に代わってロボットがスピーチ・セラピーの主要部分を受け持つ未来も近づいている。生身の言語聴覚士に残された領域はどこであろうかと考えてしまう。

言えることのひとつは、ロボットはどれだけ超高機能のAGIを備えたとしても、自らが産み落とした我が子の子育てはしないであろう。学校に進み、友達と喧嘩したり、学業成績に悩んだりする経験も無く、就活に奔走したり、もちろん失恋などもしないであろう。

たしかにロボット言語聴覚士は、高機能のAIを駆使し、人間心理や行動の大規模統計調査を実施して詳細な解析結果をクライアントに提供はできるかもしれない。しかし、現実の世界に生まれて育ち、悲喜こもごもの日々を体験して悩み苦しんで育ってきた生身のセラピストから受ける指導やアドバイスには十分な存在価値が有り、AGIが飛躍的に進歩し実社会の隅々まで入り込んで活躍する未来に至っても生きて血の通うわれわれ言語聴覚士によるスピーチ・セラピーには十分存在価値があると言えるであろう。

おわりに

筆者は、敗戦直後の昭和22年に生まれたいわゆる“団塊の世代”の端くれである。給食に出される脱脂粉乳を飲んで育った世代である。まだ焼野原の残る街に欧米文化が圧倒的な力を持って巷に溢れた。それに接して米国のような超大国を相手に“太平洋戦争”を闘えば負けるのは当たり前前に思えた。そこで、言語学を学び英語はもちろん広く外国語を身に付け海外をもっと見て視野を広げなければならぬと思ったのが、言語聴覚士になったきっかけである。

近年、若者の海外進出の機運が衰えているという

指摘を耳にする。結局20数ヵ国以上、50回近くに及ぶ世界各地を、主として砂漠地帯周辺を周ってみて貧富の歴然たる差を痛感した。アジア、アフリカ、南米を中心に下層庶民の生活は貧しい。貧富の差が悲惨な現実である。南アフリカや香港訪問では、大英帝国の今なお衰えぬ実力を眼の当たりにし、南米ペルー訪問では、かつてのスペイン帝国の実力も肌に触れて感じさせられた。

実際に旅して現地へ赴き、一般庶民の生活の実際を目にし、人種差別を体験してみなければ分からないことは多い。後を託す若者達にはもっと世界に目を向け、足を運んで世界の惨状を目にしてほしい。端的に言えば、G7（Groupe of Seven）唯一の非白人国である日本の成すべき責務に気付かされると言えよう。

謝辞

このたび高知リハビリテーション専門職大学を定年退職するにあたり記念講演会を企画していただき、さらにその概要を記す機会を与えていただいたことに厚くお礼を申し上げます。本学の発展を心より祈念しています。

文献

- 1) 大島緑子, 武内和弘, 三宅美和子: 重障児の言語訓練. 旭川荘研年報3(1): 44-51, 1971.
- 2) 江草安彦, 末光茂, 今井良一・他: 重複障害精神薄弱児の実態と其対策. 小児の精と神11(3): 155-162, 1971.
- 3) 近藤富子: CorneliadeLange 症候群の言語発達に関する一症例報告. 旭川荘研年報6(1): 7-14, 1974.
- 4) 武内和弘: 一言語聴覚士の臨床遍歴. 人間と科学 県立広島大学保健福祉学部誌12: 1-7, 2012.
- 5) Mehrabian, A, & Wiener, M: Decoding of inconsistent communications. Pers Soc Psychol 6(1): 109-114, 1967.
- 6) Mehrabian, A, & Ferris, SR: Inference of attitudes from nonverbal communication in two

- channels. J Consult Psychol31 (3) :248-252, 1967.
- 7) 西江雅之：新「ことば」の課外授業，白水社，東京，2012.
- 8) 林四郎：表現行動のモデル. 国語学92 : 62-75, 1973.
- 9) 武内和弘，三次正春・峰松洋一郎・他：口蓋裂児における言語学習能力の臨床的評価の検討-特にITPA検査法の有用性について. 日口腔外会誌 29 (8) : 1394-1402, 1983.
- 10) 宮本靖子，武内和弘：ナゾメータを用いた鼻音性評価法の試作. 電子情報通信学会技術研究報告 106(614) : 37-42, 2007.
- 11) ソシユール，F. (小林英夫訳)：一般言語学講義，岩波書店，東京，1972.
- 12) メルロ＝ポンティ，M. (中島盛男訳)：知覚の現象学 改装版，東京，法政大学出版局，2015.
- 13) 芳賀信彦：リハビリテーション医学. 大森孝一(編)：言語聴覚士テキスト第3版，東京，医歯薬出版，2018，80-81.